

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 23 日現在

機関番号：3 2 6 3 0

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2011

課題番号：2 0 7 2 0 1 1 9

研究課題名 (和文) 日本語の活格性にまつわる記述的研究

研究課題名 (英文) Split Intransitivity in Japanese

研究代表者

竹内 史郎 (TAKEUCHI SHIRO)

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号：7 0 4 5 5 9 4 7

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語史

1. 研究計画の概要

時代語や諸方言を含め、これまで日本語に活格性が存在した(あるいは存在する)ということが十分に検証された研究はないと言ってよい。本研究は、日本語に活格性が認められることを確かめ、その性質を詳しく記述することを目的とする。この意味で本研究は、特定の共時態における言語現象にとどまるのではなく、時代語や諸方言を含めた日本語の格標示体系にこれまで認識されてきたものとは異なる新しい性質を見出そうとするものである。

2. 研究の進捗状況

これまでの研究成果は、主に、(1)「古代日本語の格助詞ヲの標示域とその変化」(『國語と國文學』85巻4号)、(2)「助詞シの格助詞性について 非動作格と品詞分類」(『語学と文学』44号、群馬大学語文学会)、(3)「ト節にミ語法を含む構文 助詞トによる構文補記」(『萬葉語文研究』第6集、和泉書院)、(4)「ツツアルの歴史的展開 文体差に着目して」(『成城国文学』27号、成城大学国文学会)等の論考において発表した。

(1)は、奈良時代語の格助詞ヲが非動作格と特徴づけられ、この時代の活格性を形づくる要因となっていることを述べたものである。(2)の論考は、従来、間投助詞ないし係助詞と考えられてきた助詞シについて、その格助詞性を指摘し、併せて、動作主を標示することがきわめて稀であることを明らかにした。

(3)は奈良時代語の活格性を考える上で重要なファクターとなるミ語法について、特にその係り先について詳しく論じたものであ

る。(4)はツツアルというアスペクト形式の文体上の分布を歴史的に明らかにしたものである。(4)で扱ったテーマは、一見日本語の活格性と無関係であると感じられるかもしれない。しかし広く世界の言語を見渡したとき、活格性と述語のアスペクチュアルな性質が密接な関係にあることはよく知られた事実であり、日本語の活格性についても同様に、述語のアスペクチュアルな性質を考ることなしに論じることはできない。(4)の論考は、このような意味で、筆者のアスペクト研究の「入口」ということになる。

3. 現在までの達成度

やや遅れている。

(理由)

特定の助詞や構文の振る舞いについての言及に留まっており、格標示の体系を論じることができていない。

4. 今後の研究の推進方策

今後は、まず、奈良時代から平安時代における、主語節の動作主標示についての考察を行う。主語節と助詞イの関係や形状性名詞句にまつわる石垣法則等について、今日的な解釈を示す。また、平安時代語の主節の格標示体系についても、これまで行った考察がまとまりつつあり、歴史的な変化も視野に入れながら、平安時代語の特性を示したい。

以上の考察により、より体系的に古代日本語の活格性が明らかになるものと考えている。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

竹内史郎、「ツツアルの歴史的展開 文体差に着目して」上、成城大学国文学会(編)『成城国文学』、27号、1~12頁、2011年、査読無

竹内史郎、「ト節に三語法を含む構文 助詞トによる構文補記」上、萬葉語研究会(編)『萬葉語文研究』、第6集、89~107頁、2011年、査読有

竹内史郎、「旅」考上、大阪大学国語国文学会(編)『語文』、92・93輯、24~33頁、2010年、査読無

竹内史郎、「助詞シの格助詞性について 非動作格と品詞分類」上、群馬大学語文学会(編)『語学と文学』、44号、9~23頁、2008年、査読無

竹内史郎、「古代日本語の格助詞ヲの標示域とその変化」上、『國語と國文學』、85巻4号、50~63頁、2008年、査読有

[学会発表](計2件)

竹内史郎、「ツツアルの歴史的展開」上、成城大学国文学会(2010年10月30日、成城大学)

竹内史郎、「旅」の意味について 上代語と現代語を対照しつつ」上、国語語彙史研究会(2009年9月19日、神戸親和女子大学)